

■第1回大台ヶ原自然再生推進計画調査・野生動物部会

◆日 時 平成14年12月27日(金) 13:30~17:00

◆場 所 奈良市「春日野荘」

◆出席者名 検討委員、関係行政機関/6名の委員全員が出席、  
環境省/安部自然環境計画課長補佐、吉井近畿地区自然保護事務所長 他

- ◆議 事
- 1 大台ヶ原の自然再生について
  - 2 これまでの野生動物調査について
  - 3 自然再生推進計画調査について
  - 4 その他

◆議事概要

- ・大台ヶ原自然再生推進計画調査・野生動物部会設置要領(案)について事務局より説明を行い、本部会を持って設置要領案は承認された。
- ・検討会の座長を互選により小野委員に決定した。

(1) 大台ヶ原の自然再生について

- ・(環境省より説明)

—他部会との関連について—

委 員： 他部会(森林再生手法検討会・利用対策部会)との相互の関係をどのように作っていくか。作業を行う上で部会同士の連携が必要。他の部会でどのような議論が進行しているかどのように把握できるのか。特に森林再生手法検討部会と本部会は関連が深い。ある程度各部会の意見が出たところで、総会のようなものをもつとか、打ち合わせの場に、部会長だけでも参加するというようなことも可能ではないか。

環境省： 既に本調査のすすめ方について調査を担当する各機関・コンサルタントで合同の打ち合わせを行っている。そこでは、各部会でなされた議論の報告をするとともに、その中で他の部会に関連することがあれば、そこで検討をしておきたい。その中で委員に聞いて進めるべき問題が出てきた場合には、個別に委員にご意見を伺い、取り入れながら資料を作成したい、部会開催の際に他部会の資料を用意すること等は、準備をして対応したい。また、総会のような形での会の開催や打ち合わせにおける部会長の参加についても今後検討していきたい。

委 員： 資料の計画調査フロー図によると、本部会の調査結果は森林再生手法検討部会の扱う範疇である「各区分地域ごとの森林再生目標の設定」というところにフローが向かっているが、これは森林再生手法検討部会と一緒に行うということか。

環境省： 考え方としては野生動物部会において、それぞれの植生に対して理想的あるいは目標とされる動物相が示されれば、森林再生手法検討部会で、それを目標に反映させていくべきだということをフロー図は示している。これまでは森林再生の対象

として植生のみを考慮していたが、今後は動物をも視点に入れることで、より良い再生計画を立てていきたい。また、森林再生手法検討部会と本動物部会は独立しているというわけではなく、全体の自然再生検討会の中で検討調整を行うことで関連づけられると思っている。

—自然再生の目標について—

委員： 自然再生というが、いつの時点の大台ヶ原に戻すのかという構想はあるのか。もしくは新たな大台ヶ原の自然を作っていくのかどうか。また、再生にかかる時間はどのくらいのを想定しているのか。

環境省： 考え方として、特定の過去の時点に復元するという明確な目標を設けて、それを目指すというのも一つのやり方ではある。しかし、実際に過去の時点と現在の時点では様々な要因が異なっており、戻せないような状況があるとするなら、究極的にはもとの自然に戻すという目標があるとしても、生物多様性の保全という観点から、実現可能な目標を設けて、それを目指すという方法もあるのではないか。そのためにも、現況を把握し目標を設定すべきであるという議論が検討会で行われたと理解している。森林を考える際には5年や10年という期間ですら短いので、人間が自然の回復に手助けをまず行い、そのあとも継続したいと考えている。現時点では何年で事業を行うということではできないが、継続的にモニタリングを行い、問題が出てくれば、その際にまた、再検討を行うというスタンスで続けていきたい。

委員： 過去のデータがあればよいのだがそれがほとんどない。また、関連して、自然再生というのは破壊された自然を復元するというのが前提であると思うので、大台ヶ原の自然は破壊されているということが、重要な視点であり、明白にするべきである。どれくらい破壊されているのかという現状の認識をするために調査がまず必要であると考えている。また、繁殖を考えても周囲との遺伝的な交流を持っていたりする状態が健全である。大台ヶ原のスポットだけを回復するというだけでは完結しない。長期的には紀伊半島全体の生物多様性を保全するというのがゴールであろう。そのような、展望を持ちながら進めることが重要。また、本調査は来年度で一応終了になるが、予備調査であるくらいに思っている。しかし、今後につながる調査でなければならないのでスタートは重要。そのためにこれまでの植生保全対策事業などを振り返り、総括しておくことが、必要ではないか。

(2) これまでの野生動物調査について

(3) 調査のすすめ方について

・ (事務局より説明)

—下層植生の重要性—

委員： 今まで被害状況の把握が主に木本に注意が払われてきたという経緯があるが、

下層植生や腐植層の衰退は種の多様性にとって重要な問題であるということを強調しておきたい。これまでの植物社会学的な群落の分類で見ると下層植生があまり重視されていないので、同じ植生分類でも下層植生が明らかに違うことがあり、特に大台ヶ原においてはシカや人間の影響でそれらの違いが明白。そして、ネズミ、昆虫などの動物を見ていると下層植生の状態で生息状況が変わる。森林再生部会において永久的に調査するポイントをまず挙げていただきたい。その上で動物調査を関連づけていきたい。

環境省： 森林再生手法検討部会においても下層植生の重要性について議論されている。今回の事業では多様性のレベルとして、植物群落の多様性というものに着目し調査を行っている。下層植生の有無も調査を行っており、それらの健全性が保全されているかどうかという視点で調査を進めていくと方針である。

—調査の視点・枠組みについて—

委員： 現在をどこまで把握するのかという議論が必要である。一定の枠組みを作るなり、テーマを絞ってどれを重点的に調査するかを考えておかなければならないだろう。ただ漫然とファウナを見るだけでは回答は出ない。調査地点の選択に当たっても、そこで調査すれば何が見えるという方向性がなくてはならない。

環境省： 群落レベルごとの指標として何が適切か、より広い範囲の指標としては何が適切かというように、生態系のレベル毎に、どの分類群を調査対象とするのかということ整理するべきかと考えている。将来的にはモニタリングとして進めて行かなくてはならないと思うが、具体的な調査項目をどう挙げていくかということに頭を悩ませている。どのような観点で選べばよいか等についてご指導いただきたい。

委員： 調査の日標設定によってどの分類群を選び、どのような調査手法を選択するかが異なってくるが、今年度中に調査計画を立案するところまで持っていかなければならない。過去との比較でいえば同じ場所、同じ調査法で行わないとならない。同じ場所であれば少なくとも現状とある時点の過去を比較することができる。将来を考えても永久コードラットを設けて同じ調査地で何十年と調査することが必要である。

事務局： 実際には調査の立ち上げが遅れたので、調査を開始するのは来年の春以降になり、現在は調査の視点、目標、手法を詰めていく時間であると考えている。そのためには既存の資料を収集・整理し、何がどういう視点・手法でなされているかを検討し、同様の視点で対応できる調査が何であり、新たに導入しなければならない視点が何であるかを明確にする必要がある。これらの計画を今年度中で確立したい。

委員： 自然の攪乱の程度をランク付けし整理する必要がある。そうすることにより、まとめの段階での出口が見えてくるのではないか。その整理が正しければ結果は出るであろうし、間違っていれば結果はうまく出ないであろう。

—データ収集に関して—

- 委員： 既存データは公表されているデータはもちろんのこと、博物館や個人のデータなどでも可能なものは収集すべき。また、過去の写真の収集というのをしてはどうか。環境省ホームページなどを通じて呼びかけるのも、事業に関心を持ってもらうことになり、普及・啓発ひいては合意形成ということにもつながるのではないか。
- 委員： 市民からの情報提供は、意見を聞くという意味や、事業の内容を知ってもらうためには重要だが、信憑性の問題等から、専門家がそれら情報をどこまで利用できるかは疑問である。とりまとめは難しいことを認識しておかなくてはならない。

—対象生物分類群について—

- 委員： 地表や腐植層との関連ではモグラや両生爬虫類が重要ではないか。両生爬虫類は森林の乾燥という視点から注目されるし、昆虫を餌としていることから、森林の健全さを物語る昆虫の豊かさを計るということからも着目される。
- 委員： 昆虫は林内や林と外の環境とのつながりを見る指標となる。例えばブナ林といっても、下層植生の有無、林の年齢、若木の更新や倒木などの循環が健全に行われているか否かなど様々である。循環などにはキノコなどの菌類も関連してくる。そのような違いを昆虫を指標として表すことは可能。見た目には環境が整っているようにみえても、昆虫の個体群が健全でないこともある。森林全体の物質循環という視点も必要であろう。
- 委員： 今後の方向性を含めどの分類群を対象にするのかは議論しなくてはならない。下層植生の重要性はすでに出ているが、土壌も重要な視点である。ネズミやモグラにおいては土壌、特にA0層の発達などが重要であり、大きな問題になってくると思われる。しかし、委員の中には土壌動物の専門家がいらないという問題もある。今後の計画立案の中で調査が必要な分類群だが、我々委員だけではカバーしきれないものがあれば、別途検討すればよいのではないか。

—関係機関意見—

- 関係機関： 野生動物も重要であるが、地元が最も関心が高いのは、利用部会である。本部会とのかかわりはどうか。
- 座長： 野生動物との関連でも利用部会との関わりが大きいと思っている、オーバーユースをどの程度に控えるかなどはまさに利用の問題である。利用部会との連携もそういった意味から必要であろうと考えている。

(4) その他

- 事務局： 次回部会では具体的調査内容について議論いただきたい。